

Interview transcript: 2017 Haga [5:59]

南三陸町の方でたくさんの方がもちろん亡くなって、まあそれを伝えなきゃいけないっていう気持ちもあったんですけど、あんまりこう自分の真面目の父親が亡くなったっていうのを伝えるんでどうなんかなってこう思ってきて、ちょっと自分とその葛藤があって、いろんな人にこの震災がすごく辛いもので、まあ皆さんいろんなね、あの何千人、何万人っていう方の、方が亡くなって、皆さんね心がこう本当に、あの日から止まったままの方がたくさんいる、それを伝えなきゃいけないっていうのは、自分の中ではわかってるんだけど、なんでだろう、やめようって思ったんですよね。うん、だからそこにこういう理由でっていうのって正直なくて、ただ自分の気持ちの中で、あんまりこう自分の父親が亡くなったんです、まあ、悲劇のヒロインじゃないんですけど、そういう風に思う方も多分いるんですね。だからあんまりこうメディアに出て、こういう思いをして、こう、今私生活してるんですけどっていうのをいうのもちょっとどうなのかなって思って、それで、断ってきたんですよ。

仮設を支援してて、地域の住民が、ああ、芳賀さん来てくれてよかったとかなどもね、今日もね、訪問に来てくれてっていう、その、ありがとうっていう言葉を聞いて、この仕事をしててよかったなって思えたんですよ。最初はそこまでね、あの、こんな長くいると正直思ってなかったの、どうしようかなって考えながら仕事してて、まあ、地に足がついてないっていうような、でもやっぱり毎日住民と関わって寄り添ってってなった時に、この仕事ってすごくいい仕事だなって思えたんですね。うんだから父親だけじゃなくてその自分が携わってきたご縁でね、つながってきたその住民っていう存在も私にとっては大きくて、私がこうしてる仕事って、直接的に何かをしてあげたからっていうのってない目に見えないものなんですよね。うん、ただ話を聞いてあげただけなのに、その救われたって言われた時に、何ていう仕事なんだろうって思えた。

南三陸町って言ったら海、正直にくい海でもあるし、なんだろう自然災害だからどうしようもなく、すごく海を憎むこともあったけど、でも南三陸町って言ったら、やっぱり海。私は今でもこの南三陸町の海が好きです。多分その時間ですかね。最初はすごく憎かったけど、こんな津波さえなければ。まあ私だけじゃなくて、その町民の皆さんが海を見るのも嫌だと、うん、でもどっからでも見えるんですよ。うん。でもやっぱり私が生まれて育ってきたこの南三陸町の中に、海って切っ

ても切り離せないんですよね。やっぱり南三陸町って海だよって。うん、なんか思えるようになりました。

海の幸だったり、うん、ていうのってやっぱり海からとれるものなので、やっぱり海好きなんだなって、うん、思いますね。今は実際にその震災にももちろん会った人じゃないとわかんないことももちろんあります。そうではない、その外部のね、きっと何かを感じたいと思って皆さんこちらに来たんだと思うんです。帰って、伝えて、東日本大震災を風化させないようにしていきたいなと思ってるので、是非、なんか、こう、どうしようって考えてる方とかいたら、実際に、こう、被災地に来て欲しいなって思います。で、けっこう、やっぱ、メディアに映るのって、いいところしか映らない。うん、こう復興してますよっていうようなところしか映らないのが多いので、やっぱ、自分の目で見て感じて、それをこういう震災だったんだ、ああ、ここまで津波が来たんだっていうのを自分の目で見て欲しいなって思います。それだけです。はい。